

9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6

1954
775
214

群書類稿
日記
陸



曾
195
214

群書類從卷第三百二十五

日記部六

檢校保已一集



堯孝法や日記

文安二丙午年正月一日天氣悠然屬陽春之歲
例小戸かせぐみ條の社頭よまうて海もつゝ
ノニ首

社頭春

ゆされ神乃あはれ代の方の春あはれこそねほりへそ
社頭ね

ひ春すゆのよれと山の裏手のわきひて秋あふん

社願祝

あらわなよたまく宮役ねりひのまみかみをすて

方陽景鮮七社法樂歌

八幡

福山ちるあきぬまをひそかとく祭りあをすて

玉津寫

及くわよ小鳥ゆあけまもくにんまと猶くわよし

小波

心くいきくの神の祭事とぞいはきく神山もせん

住吉

すれはのねりあはうてれなつてくねうづふひ

祇園

横よりれ神のまことをまよひあそひ祭祭を下く

瑞翁

福山ありきよ祭のわきうめにひく春風をぬく

日吉

神の夜の日吉とよとかくてもまのまゆせよがみえ

及源文達祖傳讀昨吊 講師春森養若法宗以後

來集故近席春部上於神の讀も並び及教説終

次ふ一禮

義乃國先素庄力奉讀四次還補仍一作日序
不知也詰引等并與之附細川右馬助入道家也

内侍

あふくいはうとひのまうひもむけりは代かたりくみ成
逐すと自世筋鷹鶴昌名割せむ内侍に即候一と
殊文書状小乞てゆあまひきら

立かくあくさの松ノ木のねきよへきめのせする
只今内侍差上せ承そりまよし御内侍今
まも管領城の佳瑞とて室町廢公事中方に御
あひあひひきしきがくもかうかく行る事にゆめ
可一昨日れ返哥トウソウゆうたのすゑそりけり
ニ仰さんとつまざりじゆまうりゆくあまくはま
一内侍ゆうて示送うたたこえまよ金言乃
稅りてこゆりや

セウてひ下句に定じうり殊音にてゆきハ奇
妙の歌と生えまうと因詔お示仍庭松歌と云歌
出く三善常府放尾左来て夜洞とゆふ典既音
信く義和くはな鷹昌時よりゆきうとて松
稅りてこゆりや

山日寒と嵐吹雲霧映頬西天よじひて纏月と
衣飛くゆくとまくわくと
夕の月はそれともかまくとあくをゆれく
乞水仰西く後故頃

四月漢雲還晴、民部少輔頭役下總入内赤穂兼元秀
官道親恩以下山ひどく人之味

有天氣快晴叙往執筆師郎

神と相克ありて未だぬと寧まくわざかをうる

今日も日向一人にて遂行其事は沙汰

年りに暮れを教りとどり

やうりあわづれりにまよえりんみのわやあ

ニヤウル逐ゆよ

ノリノリトモウレタシテアキラカニ

六日寒風に雪又まうて

せあれどもと事へ未以てはうるハ神もくらん

入東深宵

七日雪れうちにも活けて

かうるの袖もあれど神のる處の壁にあて夜も摘めり

八日出はひちぬれあくゆきあ

着不得くあらむけとれども神の無体つゝが

まこゑは毎春のうへ

次第ニ者常房ありて

一縷けりやうに

次開

九日白雲教礼つめうて入下うてゆり

丸神へあとづくに立候がつまうて手あひ今

沙汰お飲もよすくにまうて六十首うち済

ノリに

春天家

やくかのる者とのせたのゆきよあはうそあれも風

夫人車

夫車りてあふへへやいまのよのねよけよきる京ハキミ

秋人事

月経りてあとかすりぬるくとほれ光の秋かうす

冬耕也

あさうとうとうまひのぬとよめの浦まれちのえよ

東地役

あのとうがまの先りひきともてまうせんうれ
を度還浦共東江福多かに役近一仍る道真如
船浦く御役ひ牛中納言の直りへどもそれもい

わし山也因名もうち計におりひをゆりやうも泥
礼車也

人教正徹襟作

ト總入道紫萩

沙深常烈

冕

知蘆

葛原氏也紫外一枝也、や鶴丸

十日又まうて作に門をよ入て令をくわす
ノハ夕月取も興行をきぬうすちあつて其の
室にえんにあはくれハ六宗後左め牛中納天
祚周陽堂ふ奈八幡文かく巡狩

さくからうの月れ西新もよすとねくまむまのちわね

十一日七月奉立るにうちゆりこよと年始のうこ

をもすりて

いぐ事も行あまうかよてまうれんふ代の後と云ひうて
十二日讀經説解如常

十六日此高車有次之首金原よ

高知去

竹山が高車の心うある人と家小を二三て立たせば
松残雪

松がる古えへめくはす根かひよどりの葉が松うえ
冬未脱

ちきくふねつて津と秋え主えふち候それら身
當度六十首よ

明露

あまのアヒヤリえハ高そそる日月を見ゆ候まく
稀矣

誰あがひかどふ皆う參うひよどすつゝ心前見
浦鷦

和赤川浦にあましれりや、友鷦のねく聲う和あひ未
人ね出歌中演仰因溝仰實社 中智寺浦
春江卷九 氏邦が獨題経 法橋長全

法橋經長 因雅 散詮寫教 沙漏常熟

沙漏元康 友尔主燈 源實信 友尔正信
沙漏智庭 友尔燈後

宗頤 念阿少と共二人

□

官道祝忠

十四日讀經稱名并常自宣池院法事中切法架
二十首歌以而至則後追了吳全法橋二十首題
而空同深吊了自古以來哥添別事中
十首勤行也每日也他事心靜今和歌唱稱名
十六日明天添空町飯はいりつれ義第大方及因
卷教進入吹頭人こ来て六十首哥とくわ内

當出谷

あれもが生浦よの春うや翁へうるをれひゑ
遠易花
かうれむちうづ奥も従うしゆのたうけよ
名ふ鶴

むら田のつらまひと安浦わぬまう人をうす

歌題而 読師固 清所志佐卷云

人致君深 春秋卷云 素珠_{入内}和安_{入内}

元康_{内安}

_{入内}

國雅

紀元威

_{解由}

源久國

常純_{夫節}

_{入内}

安永元康_{内安}

_{入内}

紀元家_{安日}常安_道

_{入道}

安有_{在岡}

_{入内}

上善元秀

高安

安永元安

_{入道}

元仲

橘元家夫節與所望と十八人

十七日勤行也常每春之例水アガセ_ト七不_トそ

四百、六月もあリ

十八日二善為教もこじく月以迄始

都早春

雲々くね山もとがゆきすうひの壁に去る

梅薰風

匂ひの風をうきて梅花うつむかひてそんはゆ

春せ夜

まづのよしにみちどきゆひととくふち代のくこく
當夜十五首へ

寫在春

のちかるよのちうと雪はまほさじはらひくも

と早蕨

詠けくすよしのひかる春まもまくに墨の葉のあくよ

笑處

かくをよなうまたすく入達のよひ仰もる

欲取衣

口そえうに力がりすがくの山風のうかまく

湯村烟

うそやく浦はく風はくやにうふをうたねりよ

題中 漢師因 構師貞基

人數恩源 永祥

般尼死

内繁

方系

固雅

貞基

布施

鴻基

女友

与北

你持子

富木竹

為教

常熟

貞秀

以下教家

十九月中就上人まで觀經講演信心詣所修勸

行せ代本男山へ進代友

廿日畠山被召更入内 賢良家にて月次令和ノ

初春ね

今日一ノを子自ヨガニモ申ムハシク四仄ノモノアシ
對本

チ底ナリヘリヒシテモトモカニタモハの陰中ナリセ
房

夕色ムキムク浮かベテねのくれ音ゆふ秋風蕭々
持衣

林立ミヤシ葉青す多麻衣夕日がれの夜シルカリ

谷石實

ゆあ山實此後心の板ビテ今きなむるよ

藤

名ハナツツリの木トハ急シトクねめれん
父是モチ井中納ミ入内 清仰曰講仰常砌
人教充ち井 事ミ一夫左宗義入 弔 正微

春日二往入内 畠山次郎 固雅 善盛

常熟 心惠 念光 思常佐 智彥

宗砌以下数家

恩済中旁哥及被深シホ、題一首玄俄可況
之有歌志寄ミヒヤニ方死年三清仰宗砌初
春之松ヨメル和哥と清上心中歎惜聲盛評
樂歌ニ極シシテふと歌也併らるア也

廿一日兵庫助貞親りて月次詩小

初春見鷺

春之れもさくみ波まか鶴のあ代のもくを尋ね松え
南度二十首

度春夜

此句初度是也

ひそきそぞくかられ夜ひつねゆわふりふりほ

初久京

はまくかくとくまくわはおよきりえよもひけどもやとほ

若而ね

今日ようそくじゆかくふ武隈のねづとむらゆくわしこ
此句初度是也

かばはぬとくめや

廿二日一色た京ち支教次都そ月次合始

行延年友

あゆのれをよもかひくよせのひと宮に立す春行

當度四十首

節雲舊

冬有しけをよせじせうそくげるじつうれ等のひよく

初來京

おどひのこうりはしとせやくべくすくわかよせれ

名不詒

かづれじよじよもくらきのまじうなきのあだはく

思性事

此題中 漢師同 諸師
人教他更入乃賢良 亭之 正微 三往入乃
常固 沙渾周乃入之
固班 心冕 常熟近苏
範盛 之太 朝乃
贊盛 習禮 時阿
壽阿 常紹

行文正微之往
固收心冕常熟入
賢盛智道寺町

人教他更入乃賢良
亭之正微三往入乃
常固沙濟周乃入乃
固微正冕常熟近苏
範盛之志未
賈盛智舊時河
齊阿常往

齊阿常作

廿四日細川吉輔助入乃道賈家毛月次會
庄松次久

夜相笑夕

よしのうへひよみをすらうるさく

題
闕

城下の風物かひくと
すまほしきうわぬあうや

卷之三

是故山中多川也
水之風氣也

神抵

かうすのひすすきうちかくわくにまく
顯志而淡雅同清而之善尤秀

人
君
之
事
也
不
可
以
不
正
視
也
此
其
所
謂
正
視
也

遠江守相堂
天皇持宇 賴秀
常幼 進發行
入及

素昧古今
稍安安固
无寐肉苏
持无失
秋毫

薬作寺元明

元盛

安田勘

以下大余人

廿六日ニ賓院つゆすと社取役君とて申候

よきよきつうじこ

この門ハ神也ひわりひもすむきみあらめどん
當て連音百約ひり及曉て返出

大ち沙彌え唐来自曲、既初撰清玄事済合力

はれまく

廿九日狂大臣

二月一日勤め如毎朝の政事あうるに月を百首
次の角頭も首領もゆつゝ時

春山

春の日れ名へゆふ神もそらに未みけに春をさり

秋河

誰々今あそこの河あらじふのぬもなうて月をもん

林社

よきよきのりやうそれかねの病氣主湯より以

冬風

おもふもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよ
葵花園の那波の梅聲にゆ内細川もも助
入られりと一枝とうり竹一枝よ清ひはる
このもいかよひてのうちよ小豆いわ香を知るせよ

返一

あれが船とあらうの橋へあそひのまきうわ
十日を庫助貞松りとく月次つこ首に

夕春雨

やひはるはあれまくられはく春を近づわのまみ川

名雨花

まきはるはくわれめ津と半に解するむじづき

れも魚

うめりけの城毛ねまつちほくすれまくまやく

當度二十首に

春夜

心ありてもかはるよかどしの月あらふ波ありま風

春秋

もろはて又おひよすゆの空やいとじくはるのすれ

春衣

あふ人ともおそれおわきまつてあやつてあたまき

夫娘

あひやくもの波ひとねひとうよのまくまくくお

題名而 漢吟因溝吟 狂忠人歌麿先生

十八日ニ善為教りくとく月次二首以

河柳

河柳のちりけよとくうあらぐる水やくまく

五月

やがれの光は小松のうて草むらをかきぬけたる日
思ふ

〔 〕 うきよあゆみあまねくふれよめつん
せうる実相流准所後古にまうておて社頭のま
のねにほそく水あそそひつけゆもゆく
なりじ水のうきくれはまをえすよめくと

山中

ゆきうちかせのまへにかくらふ浦くまゐの島す
女官一色左京ち支教院來と月はく肩

帰居

あぢとひゆふくそひるのやひまくねまよのと
初む

えののきやまくいと病候く風をよひと月

秋意

秋のうよ人やいよてうれハシのゆまきれ
あねわ千首平

早蕨未遍

おうゆうにまうりはりくめてゆくまくね候まくひ

夕落花

おうゆうにまうりひよけやく夕へのおれのうひと

うれ

うきあひをはくにまくせいつ暮れうき

吉澤堂水

さあらわのあれまのうじてうふよとま

水江芦

うきあひをはくにまくせいつ暮れうき
歌をや漁郎因溝仰奇り人教わる

石清水竹年細つもと細川深波すら

作あ十首

梅葉袖

うきしりよ袖の青波をまくよもとさくわく
すみき

時鳥初音をうねれうそもれぬあれうきよつむ
早秋扇

秋のうるわいめあらうありよれどくらうあやま

浦水草

和音浦にうとうかく漁舟ちねむらあてあくよみ

羽方扇

うきあひをはくにまくせいつ暮れうきよつむ

六月八日細川たる助入内道賀來まで月以三首

ありれかうき

浦五月

あきかわくねむら月をうきよみのあく浦

山室夜遊

ゆくから被ふるわきけりつゝれ小ゆゑ

浅野家

うかりてよし初月のまことに福やのよ達

當月六十首に假名歌

今日の子月

うち唐や年代のちに川河をすりまつと

柄のもぢい。

やうれ背柄つよかひがそよえふものよつた

春ねらき

ひつくり日暮ゆかてくとまくまく

題古や讀仰因講仰元秀人教わ先

今日吾自ら有福考典庵養子うそせねどり

管候才

もじてよしやされ仰宿よ承次大概

りうて仍ふ日のす、まよひとあくりゆう六十首

く題代さうて

秋心も

持むめりいぢいそん月のまわふとひりそそ

十六日葵花園よまくはゆのは御室あちの

計飯うしのと只独眺らうて

あひひあひとあくきうれまく独立のあれけい

十首黒谷のまれとくとく實院門主とまうし

まつりやまく 宝地に法界門下人へ
そもそもにひひゆ

夕日紅うつうひきりふきされらすらひます一ものまく 宝
十八月ニ善る教もとて月次ノ首に

遠尋む

まつりやあまに病よひかれぬものへきく者凡々よ
花ト交

かねよきうあきぬ一本ノ花の後承くよの笑うるさん
疏扇

左手うともねきよもくぬ膝をれやまの向いの下ゆ
稿元吉東作ち写真寫すもゆて宗徳院去

法樂百首

子日

みの見ゆ一春よきれな松の枝やじくにひくら舞
魚稿

よがへてもよがよのよまむれぬひあれはひじゆき

七夕

あとの涼すく夜のあくも葉落すくやぐくにくれ
落葉

病氣のきらぬ波は夕日のもつる木のうらにまづきつ

紅石

まつりやだきとておなづくあくは葉あせすれ

初春

おとひれをあやしくうむむむにのまくみ

従言

空きうちをいたへりてやすやの間ちう

上願や

左政左衛門月次律百首に

二月二日

今日もや寐れも清らかくもれりんもれりん

主林

秋けりあつの市ノソリと病もうるわが

植大

よし浦にゆかのうめがくじのえどもく下へ
山

親王

ものもれぬよ行のあうやあうと本うじてう
大八日一通左京左支放就家と月次二首よ

水色脚踏

浪うすはの黒やほづしゆうわのうけうねう

山家暮春

うひのうらうひうんますむ山家暮春とまくひて
唐柳何方

ゆやく雨と雲のうちも遠のきよたりかく歌ひて

常なむ十首

言春天

言ふ多きあの軍へまづれまゐる春はあらむ

暮春城

ありくはすじいの夕明日うすかさまづける

暮春車

小車のあくら日ぬよ春もば花の跡れひよひあわせし

暮春旅

我のそとあく春うあらひものちひをあめうへるゆへる

虫歌や讀昨因讀昨あらん教教若くは令

果て沙汰箱渡度の友聲ゆよと主よよく見
ゆくと人よ一音たゞけ時

かきくそくよすくよのよくとくれきのあらりあ
せ九月橘元人のかきゆよとて二十首題
不望やくに因よそつづりゆ

初春夜

春くいへねくうそく天津宮詠うれを五音くうや

契河原

こもひすううふくうはうふえううそくいぢに

曉遠情

ものほづくねえのれよひまくもひづくわくのうく

枕元筆とひきかへ

因自智道取が一夜都未ゆうべにて
枕上にわくむのいわくも由故とて有れありか

返へ

うちあるあくともあくともやうん扇れ波浪
四月一日勤りぬみ

二日石清水よどて六首歌演てまつて時

春明

ふ雲のふに幼なじ胡りけ方よりり春の八重山

夏夕

月とく出かあくまればおもむろの山わざと

秋夜

まちやくせの深みとて月とくまづらはるまくと

空晴

きほりゆくじの里かくす音とくのまうぢふを

惠心

かうりかくそくねり主やせんすまちやふるつゝに

津波

石清水ありゆのよどむねもと水とまじて波
やう一叶紀元盛參詔と六首とて法樂やとへ

アヘン

首夏絃

次闋

行道集

今うるいれひかほほひくうらむじよ小笑

曉之鶴

付する八公はうむれまし代ふとや林つる
頭志や 游跡同溝作之盛し利奈作が圓刻
ゆ京もろくお橋本城法樂庵遂溝狹了

七月ニ善也秀敏尾海中よりそそりそ三十

首夏

えきそよみれまくまつへなめのまとがくとさう

早苗

つるぬの旅もあひよせやすきの田井にああわうん

桔川

月つゑ入やうの河もく山あひ出うあひあうけ

繁家

我事にあひてう波にまねく波やく袖やまのまく

久東

葉一も袖ゆう山のまくそくようまくうとう

水郎

あひむれうつわをよはやたほのやけかねうに

十七日伊勢兵庫助貞才よりとく月ひ三首歌

賀茂祭

ひつまもとつこの宮のまへまへあひとがくえま
落幕付多

ねくまふぢまくとくれりハ御みかづわらう三日月

すゑゑ

かくまにまひてれんにうらやや月とくもしゐのひと

あはくや首よ

郊の頃

せうひりうれ家のどりうやううむちかくま

春の鶴川

さうたのいとよしはよもれを飛河とすくと流の年

迷宿那

あもも心のいのまほくまむくうよハうけがくと

内河去月とこすりゆと回く行くに

雲雀

あももまうりうまむのむくわうなまにうてまかん

連日

あももじふのまむれまうとのむけまれみれみれ

候鳥

やくはまうひのとてよそんうあがりめ初も
其一日鳥山ちうく入た仙室歌そ二十首次演之

フロント

産新樹

次闇

魚擣薑れ

匂ひとも差へぬるゝれども一音とあそありまか

草虫射

き月やくつから床のうらやまと表に浮かびけりよふ

主名系

あすもかわらひのかげにゆきぬまくよつて
や、朱恨ゑ

かほつもつもくわくもんづくやまむのり寢

雲浮印水

ねまの下小燈ともよそひの夜の清水の匂氣するも

出題や讀作因講昨考所

人教正倣 亭主父ふ 素欣 胸蕩 あら

大嘗祭日智蕩もどうのうれ枝よ付てやゆ

やまうらに木のをくらむまほのまくにちひあせて

差小ふを柄と津よろづくうたてあるとよう

とくへ人のいひうとうとうれりまくえとくめ
しりてあひしゆうせひつをゆく

逐へあひしゆうせひつをゆく

差のつをあひしゆう今日よ四けくらむまうや

大嘗一色左京ちまみ月ひと育

山翁樹

まゆがよみくらへは新しきうす葉あひる

曉時鳥

心あれや晴れとよりてあすかふかくまち

主名東

うわけのれ酒よ酒よ代わざひまむかく

當れわ十首よ

急早苗

まよんと春よそ一株田よ又うらどよやさか

即往友葉

まのゆりぬいえよも飛きせ中に草や花と舞

奇滿人衣

あらわらよとあつてもうそとまわ人とあつ浦よぬ

湖水蛇室

まよよよとから浦今朝一月にむしと興津鷲

夕雪法

あらそとすらの浦のむかひはよかふすりう

上題而讀師同讀師奇り人ね前例島山直作
二月以來事あ次第送例や合ひ方と因の至と
ゆとりてくゆふふふふふふふふふふふふ紙
くづくに金有ゆ

あましゆの石をひむじうひまの因とよもよ

女有留山櫛理萬葉歌歌月次二首に

印本もと

花月にわしひの里はまにわヨリシムも印本も

封月の郎云

時あかねかくく小東源て月がわらき明あらか
来不思

うつあくちとあゆれられ秋の夜もじきひりそて
當月六十首に

子親行す

やくじんへすと定うねるよし一村のよき處

お星系

やうじてあくと星れ朝もすく深寒床のぬれち

ね紹友

うへてよか成さむあらわねまわ成すぞせん

徑苦

口さればともいわとをぬも波を驚けれ苦にあら

心靜延壽

いた物の外へとれり久てもわすれ浦よよく

題名兼日丸も井中納言入内尚主と清作同
溝仰あら人教わらく

玄與日記

文保六年七月十日達門麻呂島より近海前
左大臣信輔より御船也黒木主子令供奉御船
海上出走ハ麻呂島の傍給船より出なうと以ひ
送りとまうぬ十日ゝ曉景大隅漁市にて御船
到着者有尉而御船鉢より時有十月龍伯
鉢より御船内令供奉すまうと
兼額松蔭新涼 枝

主子令供奉主あれ松蔭はすまうと秋のやうに風へハ

龍伯

暑見熱もあれと御かきねの下ねよ秋風をゆく

近寄友
長治

宿すよかつてぬなくね落よかつて、林の袖拂ふと

玄興

枝を厄ねりて病魔さへて夜も涼しわざれ初分

當店早秋月

枝

名なほまくかや林之八月にあきかゆるもん

舊病

龍伯

り枝とらずひよりとお爲末の病いゆきうちも

夕麻

枝

竹のやうやうと氣へうへ萬うつれ夕香のれ

躰拂衣

章侃

坐則て迹で隣のまゝまゝあやういがまへまふ

河旁

枝

秋風よまくひくおけり來やうけてりゆくはの河旁

蘿菊

珠長

ゆるそれぬ蘿のうれのひよく候ふとまくらゆ

岩紅葉

玄赤

も人のふたりてまわねむかうひあまくの岩のとく

寒鏡冰汎

龍伯

秋のうちやうにようす立てやされ渡國り床

かがり人數十人往ゆ一室よそうにゆ家源文
よからて日本也十二月より是れ無あり十三月より

秋月入道家園序臺そぞれ九萬興りかう十写
早てにうちへひ取ちうつりかくまへ幸侃
假在赤藤不そりかう十日そりかうを山道而十六
月入度用よ深川かうな龍納度角と送り於へぬ
ナカニ幸侃有而そぞりあひの少欲而利打節葉
花度身よ仰せハ

小男康のきよかみわん秋葉花以うもよまく而よ

沖蘇門様火松

龍納

能く成多行壁のゆきやまわりそぞりまほん

幸侃

秋葉花りそぞりかみわん秋葉花りそぞりか

主手

主手のうあれむハ秋の節の病まうれそ盛成武
紫井はゆきまくとくはまきとちまううゆきまくと
幸侃而そぞりてたが徳めうけいと二十一日
秋月入道無りかう大有あらむ即ち在來く大有
漢ありまうから持高名うつうつうつう
近附御もまくまく仕うね役もね木うまくこころ
かれハ

波乃しもまく入にの秋叶海

主手

芦太板釣船

板

又市去取と花絞りて

追風もと紅の月れねもふ

玄子

あすへ山邊の向松良吉尉福修久みあ入
山旅の網狩りは室すり宵すりと豊松く志
アのうちやせ港くゆ浦よ来きて山根城より
タ秋月入道北走りやうへ七日ちの後と清出紛れ
唐ふしけてそくゆうね和風北泉清出くらきと久
このを井戸よ仲津あら波の歌かひめりせ
竹ねと日暮くにとお浦へ御松良吉被浦よ
十日余き山根城とくわゆつとくわゆづに

四三

海き月

板

和眉のゑひりふ風ふれは月ひよのまやまえ

初雪夜

因

津と冬にふらんくされとも今あうけぬうふのねる

四鷺中衣

因

革とし葉の声よぬと衣聲かやく和や秋うますう

因一題とくわゆづて

玄子

津波風吹ひゆきとや秋の月くよがまくにまよひ風

因

吾子之不識也
則其過也亦遠矣

同

君の病よやうる月のえもそやうてたら旅立つ

卷之三

卷之三

秋のあらわさは
れを西の角の枝風もあらわす也

柳文

庵に坐あらむ
あり

あらわすに、

寄家惠

城池より人をやん渡すに近づく者無事のまつりあ

社部稿

まくらの香りをひきぬけの身
紫に透かす二十首の歌を東派と古有あり
くて涼風静まりさうり肉浦さうふ浦まじめ
道すくわくわくわく城とのもとをかくす中

手界根水代久今よりち波の事多きとまつて
かふ水浦に寝方の事、ひづかよそぞれの事
の事、ゆかれ、うくおひづかゆる事又云能能也
ゆれゆれ、うくゆれ、内ゆもと八月向行東

江口潤やくらにナチリに陸政といりうたう
タラ清もかれ事もとまうけの城之内、傍見と
地主也近友皮拂すハ十七歳の月より松代半一ゆり
ぬうれねはいふ心わきくゆりて十首細官へ士時
主翁ゆりぬ女日にて内様細官(即ち翁)細官
はああどの高橋九郎で松代氏成付主て少藤乃
潤ゆりぬ女方細官以曉てよ少藤とて豊後
國内内主へ半浦(即ち松代氏成)はもれ、古
而人氣へまでもうさうノ松庭あきらめうに古
くもも毛色山房に成へまやんとありひえ
くもきハ假人うけりすうりえりうそ松代つけ

江口潤

ゆちちのあす教えきのまれまちがくうち岩也う
俄々空うさうりひくとくろく二首山道翁之
夫うり女官はね波毛(即ち波毛)人
おきかふ浦よ江君ねやは浦とくら翁を
萩の木を梢みとう(即ち波毛)
と砂比と紙く林ゆる
ウナ約はくら波毛翁がふ又翁うつまうりぬ
タラうりにりの秋つじと翁ゆる

江口潤

京都毛絆色源庵二井守(即ち此翁)をて
百約はくら波毛翁をす(即ち翁)をて

八月一日から三日、酒と芋栗汁を飲む。面白ね
あらんが、あらうか涼はぬる人へもあらう
あらうるるれとひらひらてつる。松浦のうきと
せんじゆう。大島のこすく。とくやのくに
えりよ西へおさへ。雲のゆりとすあらう
えだく。月やいづこのゆきとゆり。とくやのくに
さうれ。國とひそはる。七月十二日。地蔵の時わ
のまとす。浦黒ハちく。すひかれて。安らぎともす
ひうちとおひふらのねとあ。ひかうりとまくら
被ひ磨の巻よさら。ほおちてひすみ。紙をとひの
里へやうといふく。アラシ。

向ちにいまのあへ原はねりてゆき鶴か
内浦よりて泊て漁村へうりね、小
舟のまへてうちへりあるふくと浦人よて
毛うんちるをさすゆく徳えのまへ景徳院
がねむよ多岐のまへてなれ、即ち今
のやまにゆくゆくと十日ゆき度るも
きよまぐりハ吹風も心のまへてまうまの室志摩
よか居也あら胡天よ室のまとせよおみせ故
もかうづく行よちかのねかくよけりぬ候ね
鳥乃志和一見もすら候くひかみてけれ、由
はうづくをあくね宮中比月と江ノ明日

そ詠りゆりぬ

叶もあれ多うたえの月夜とるすゆの浦よしも
まゆりぬと御林以承次あたき月とてりぬよしも
あらゆの山傍水波急浦つむかへあら坂近
くあれハねすらむらさくふかにさくとく成て
十八日ち候よ若れすり比良のわ節派ぬく風
もくさく酒とつわざくゆりつらじと松津のまも
こさくかひかくわどひもすくね近御林の山門ち
市れとくに夕く柳下へ主ゆるもかくとそと夕く也
者周云且恭子ゆくへ主ゆるもかくとそと夕く
ゆりぬを因ゆう福尔ちうせを答門太也つあ
役ゆ連うて帝くれ都へゆりりかれぬまくゑ
方而方々をゑをゑあせんと所やと御林松ふ御覽
ありてまくとくとくとく成くゆ渡りぬお車たかう
そうちう法官に法師高葉と用ゆりぬ人四月
ゆりぬ武庫折うも併地知をとおうてゆるうね
お氣をもとよゆりぬ御りふ國鳥毛よりゆりぬ
トホヘ九月六日一葉のあねとく秋風よそりれて
淀河とはゆりゆりぬにゆりゆりてて病にあ
ありとそ夕月夜いとく入て村戸のわちりかま
れあらゆうりわくれを七月ちよ山傍す
るゆりてゆきの入ゆるゆりぬ八月武庫折へ年

よ武庫院様子病室中外と御便り承るもまことに
仰うね主湯山高光先生向て仰せられまつた也行
并きの教也。土日竹傍千石駕。尉函高光も嘗て支
ありて鹿鳴へ之ノトモ御とぞ聖方院官葉
代用仰うて病室とく成仰うれ候。九月大
口日京のやり仰うね同サ言有向て國あむ
由奥行

死本うる有え人秋の山河川 二往波下言有
まかさば伏をそよぐもくとき 美如
又度一れ蜀の水ひ音すとて 宝手
女す昌比ノ所仰うて近御様とあそばれ也

十一月一日吉田うち山舟も出伏中名所ノ々と山
おへるやあらう新思合と通う東山茶茶
森麻の先物と見仰うて南様守とまわらぬ
南極もと新思合れあくひよ法性寺有如ミラ
シケヤクスレ仰うれ信正遍照の古跡花次山丈
毛を孤圓のは山のなづれ。智峯寺ア
せん双林もとめんとト河尔六宗有邊山あ
もつ草木不器念入も邊山のよ十役山院もんま
の而法ありあはれ紅葉派をあらて
あがけてもよある高紅葉行はれぬやまつん
下仰うねあらう東海の通す橋と波といひうれ

社友の森深仲と申立て候之を仰うね付て月
立たひ醍醐寺隣石田トヤ木萬治の間も
ゆきまくねから江口園あす井ちげりけりねあ
いこ寺毛ト木萬治後送り也室山日出山科音
根里かく多うお坂と城大津よしもとがせれひ
うらも林ウチキモカシモカタリテラミサ
セカヒトヒムヒアモミカセ也大津町もま萬治
の役人ふくられ途中にてのひ病、岸野にあ
わに車うとうりと井守坊令省と河主と
て江口の病有すれ傍也仰り遂不渡日れれど
えりけりねと升すのうひよびと淋しづ

辛三と也秋月十九日ちは歟の言承ひやうと
承の、すくうとすくうのちがうれども
下竹久ぬ又客向に

おもややあじ切高約足

入す由にまうて

ゆくよの差所あよね月日もあがちまん

十月廿二日上京兼めあひて與り

まふあれうてわくうタ内田　主音清中

萬松

大官近御極へ往復大官伏見へきりぬと折節

達に侍ル雅長をへ承和又十月十七日経巴うち食
の連歎玉身を役宣ふねあれば疋布送終也若月
うち慶長元年に改元月二日高麗を捕あひて
兩北法をくほ八時百勺成船やちくあは名卷
ウチ経巴を人うち磨かの一本竹と因写画高
山而そ中生を守毛門度參行くおも并度
印モウソウや毛利度參行くしらむ徳宗焉
使か持度参行そ伊勢地御園高あら満天也
穂少人教かね度参下高麗が浦及山名移る山半
山城ち度満口大波多度参そく度くし入松也 因日
朝よ成て経巴うち中代すねあく一經調う能

十日高麗のりりゆく明十六日薦亭あら高麗
度満あら高麗不そく四紫湯ノ墨端いきよもく力
爭からむ也以相りて捕孟門浦へありけまく
あらう本院とそ御目礼序觀せよ文主外京中
比名今もあらう高麗は高目的のゆる榮智丸を
敵あらう一々十日近御度ノ御役十八日高麗へう
アリゆうれま日高麗高志恭の令はれり承和此
基ケ清くらもく不因坊すもせんやよら無め廿日
吉高と連寄以與け也

芦の林をかゝゆる岸

玄翁注

昌化

春風よ田面の柳、まことまこと
主子

日節太納言殿を、豈宜處也。其様紙筆禁中高
詔をなとて、染井勅言殿、竟にゆりし御ふ坐と
一立あらね冥かのう。帝承うて人、一日

小壁社へ馬渦、わびそく

春に、山、その物、行、社禮や事
一わらへる、山、晴海山、はしきむ事とて、
日れいも、かみの事のゆれ

あう日、豊後、おも、升殿と、奈西、あく、人、家。
く、ぬ、おう、豊方院、あう、南深寺、奈智丸院
ひ、延喜、あう、ぬ、おう、上京寺、本興院

ちうとう、に、古、元のゆきよ
あひのが、山の、もし、約風

主音注下

女官送御、林宿、宿、自、及、白、月、や、お奉仕、
女、今、南深寺、かく、奈智丸院、九、高、社、在、

廿七、日、御、く、う、ぬ、奈、河、奈、か、う、晴、毎、て、き

月、の、序、主、御、因、サ、ノ、月、う、り、行、者、や、行、ウ、役、家、

け、下、四、色、ハ、口、禁、中、八、宋、旅、ゆ、不、ま、て、少、字

江、東、く、ほ、し、口、禁、中、八、宋、旅、ゆ、不、ま、て、少、字
御、與、江、茶、留、九、三、高、常、真、二、萬、老、ね、か、う、廻、口

入、第、あ、入、そ、と、主、年、一、あ、う、や、一、九、リ、山、休

毛丹列へ以下向桂子へ山高ち侍りゆりぬ毛去寫
法不あきれ也十日後と東御うり山高沙り経也
うち一れも東より堅方院より寒中丸樂之、清流
七日護摩より安車(あくま)かのわうと二日了
鉢巴元より助む御寺(ごじ)巴(ごじ)更法取ナ帳(あて)り
女官(めぐらし)を承(うけ)て何作記修(しゆ)成(せい)かわ參(さん)侍(し)當(とう)
人(じん)安(やす)生(なま)氣(き)山(さん)今(いま)度(ど)也(あ)り

やあくす春(はる)やえねの海(うみ)を枝(えだ)に
山(さん)の日(ひ)れ(れ)うけ定(さだ)てとおゆけ

せうり龍(りゆう)山(さん)照(てら)院(いん)後(ご)入(いり)白(しら)居(ゐ)大(だい)秋(あき)門(もん)後(ご)歸(かへ)田(た)

昌(まさ)化(かく)かく類(たぐい)文(ぶん)と山(さん)酒(しゅ)宴(えん)也(や)大(だい)有(あ)ての龍(りゆう)
山(さん)孫(まご)と山(さん)令(めい)也(や)女(めの)八(はつ)月(つき)に山(さん)家(いえ)の孫(まご)と山(さん)令(めい)を
かきれて御(ご)名(な)ゆりゆりゆりゆ

慶(けい)長(なが)ニ年(とし)代(だい)三(さん)高(たか)も山(さん)家(いえ)於(お)そ年(とし)え
竹(たけ)ゆ

試草

玄(げん)

呉(ご)行(ゆき)づつての空(うつ)の鶴(つる)病(びやう)一(いつ)種(しゆ)と(と)うとも(も)やうん

卷(まき)

うそたりて今(いま)れえと(と)うとも(も)やうん

すれ程(ほど)日(ひ)初(はじ)められ

袖(そで)若(わ)葉(は)摘(つ)めゆてゆの見(み)え(え)がん

ちよ日(ひ)鉢(はつ)巴(ごじ)へちよ冬(ふゆ)の(の)は(は)す(す)そ(そ)を(を)ま(ま)く

ヨリハ已試筆

若も多めとあらぬものも

絶已

又醉中のねぬとて

皆人へせよあふ坂のまぐりて都勢へむのくに酒也
又経已七十歳の年れそれのゆゑに
かゝつてはいはせ七十れどその暮れにさうそひ節
書竹筒にまわる事かとがくに因たす丹別がう山病
片り

試筆

二往法下玄旨

ゆき方れゆきに山野もまくまく城て望じむが
丹別やをせのうちかくわく

立かく立く立く立く浦の波 因

十首近御原う御書片り 幸それ慶聲表
町田入道存ねうおれおちきや たぐりと出森
もうおれ御書引出京すや同日絶已う余念
比連平ら東也十九日上京いきうりうらにて一作
至美の向ひ也廿日勤候ちるくまくうけちや
お拭きうてはや廿一日近御原も一奈久節月
かりとや大すと常振り當田及細作也大すと廟
及西洞院及原も大すと常振り當化も外廣橋及勤候守
て一わ興り大すと常振り當化も外廣橋及勤候守

ア哥トシモ也 近浦孫モタクシテシモトモトモく也
名門息災安浦世家也

秋物

玄子

風すてやうれり春和の夏沙よ無病の身に
花近簾
百千れあまへちううのもの毛の盛の身のせき
見も

村くに家も消て芦やれ浦のそよぎ花よりぬ
池もみ放
袖みてわやまんむがのじゆきの池よ匂ふ教派
浦浦雁

善濟る浦までの波うくもやま井の局のふかくん
節疏行

さくねたぬの衣は病々小繁かとおほひの花

夕鶴

口はあれまひうけり山をれ事うねのひくひく

夜風曲

内すねうちね入りうさんかうひとてげき浦風

海邊鷦

じふれ歌す月浦風まくまくやじうの宿

詫言

えりのぬきのむか春日山岸のむれまくすれ

廿六日兼好と一わ無り也古有近御様を打
ト序付よ十首と行五首詠も十首やから幽京
望遠舟も背もとれどもじきもへりやかは下は
せたり候えよ下向ひ候ゆんと云申門詔様へあがり
二月一日古今有名市のは済滿経文也同日宗枝
一卷写し新古今経の書之へ候也わらまくすよ也
六首近御様承様のほそとひ速奇真御美山殿
のうあうちと承様へ幽京さく業内志ヤ無く也
十日清め御音より承様ア法樂也
うらうへてのまれ様よ候様もあまのに善れぞううう
入清水ちるにて

あいづの山風吹ハ故もの酒やあらんおれけく
ナリ風あむうち然ひ先仰たりまか一條友以
速奇にあひゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと
そ思ひゆきと錢別の連歌

ねくやあひあく旅の承仰　玄宥淳
二月六日近御様承様の事までう字、紙金て
あはれう

山柄

龍山

あひづの花ハ柄のうれひうちみちもあくらうと
ね友

うう角よ此のうは故名のうれあくらひねう

春日

むちくよ淮ありそん春日山あらひに叶の浦をもと

早春

枝

あれ秋も亦や徑すんあくほうへ春岱はる人

水も如々

名なまくへちうとうはくを鶴のあらわゆく波のうつま

伊勢

守ねて清き流れやまくやいすけ川のあらわせ

朝萩病

智門原

一かくはらわやすくん夜、ねのまけよ夢り庭の約瑟

池柳陰

松子桜といひと比翁の底のみうやねまくじ

石清水

美空かう春うちもく不満のれとかくぬる旅人

笠齋體叟

まきの一葉汎波

うれよ難の病のまゝぬれ麻うすくにものむかふ

河時雨

声うちれ河風の波やうこれ山風さよはれうそ

冰色月

うそゆり波下のうへ遠をくそくしてうへ秋の秋の月

庭霜

まよ

思ひだるまじうかくも吳行ひ義もれあやうじすん

夕納原

度の雨あまれ病うち夕風よまにひよるぬすす
二月十日伊勢へ奈良に富田信法ち戻るゆめき也
ち故と城古は奈良城からもあく山邊山かと云ふ
あ口くりてすく思ゆりねたう經唐山と城てあれ
ほよあらぬ富田あまえをぬく　四月三日　十六日
ちのふ田へありうるむ御欲を更衣西へりゆりぬ
外宮内宮へまづかへけかまくまくわらひときわぬ
れれりへやうい今わうぬか宮のちとゆうれ川
宮河さやかえのとよ天の星アラムようかわう月
よみれ森を内宮へ一里満々日あらうの橋

宇治川より　神河ひうち源りみかもうそ川その
あいす川まよくともれども内宮也うちひ酒あう
南や神河ひ東やあいすく山ハ酒あうあせ
ゆくあ浦よ因みうあうあうあ浦の浦そのつま
此れををくすとよくちうゆり神の多野とあうそ
けくまうあの和才とくとよすそ川の名とあうそ
富士ケておしりゆく　朝夜

ナ吉河の浦ゆりゆくぬ又あく度礼序かと見
て旅取の酒高たり旅宿の禁古山と云うか
の矣れ内宮うね方ゆり移りてあくれはなりたは
にあくと根絆巴へとよそじうくれゆれ也ちる

仕事へゆりぬ半濟川はすふの隠れめども漏ハ
あたはまうにあかくせりし山中も伏モ

主をゆるそひあは風よ酒てくらぬ君のわき山代
山あもソウレアキシ御年良だあひよ御已西幕
と別とゆく附節席やとおうて入らるゝ送出されて
かう侍れねがくれあつさかくゆく入らりあらる
くわれと井ちよひゑのひれ写がくひやあまされ
立井ハ大はづくせた洋と打井のほくドウくふく
お坂のあまくやせす有邊也御と其宮に詔言
に雪系即興のひ寄めうと又山茶うも一わ
まねうやあとそひ未へ一光の友 杖

新月おもむくに月うづれ庭

深高

牛乳のひどとすすき泡

江雪

田舎のくわれぬへられう

玄年

春のあふれうかけて庭のあふれう花の色
咲かん御のむの壁をねくまよきくともかくね
透光原山壁へわ

咲からん元よりうむとうねうみうやひても
サ首吉のとく園あじは奥行

てひよくはいつまうか傳

梅うつうへうわづ山風

玄年

うのひのちぬてつりて
かぢ

日暮後もお井戸かくはまや水日、傍らへ下れ
ゆうね近お孫鈴利くひてり

重あま沖溝を波立たすとよだの望と
ひきくわゆゆ

うな豚とあれやせすまのむろんと袖うご
肩一日休くにうち船よりお坂へ出ゆりね二月
お坂を船御櫓へ御作利り所もりしとすす
のほすくはるゆゆ

かゝれ津樂

海邊宿

春風かきまく浦をみてうら波のあざれ船御川

五月

行家のれどりしほく船御の船とまく

苗代

村くにじとお野の船とまく小田ノ苗代

ね乃友

咲くれまくとまく酒けてねのあらよ波をまくる

社頭も

重あま振御の舟とくに咲也やまれるれむるん
往來のめあひづるほそにいれねるはる遠里小
室あくえくうねふねりもく

ゆうもあれどすれ候のほとありつまふれ
ゆくゆくをまよひたる月よりて猶以へるが
あらじゆくゆくゆくへりたるにあゆう

文政十一年十月晦日於益城郡砥用郷守之

中村直道

君書部役卷第三百七五

